

寮生活はすごいぜ！

とある一回生

6:00 今日の朝1:00から6:00までカラオケに行っていた。sぢ、んそkと熱唱、遊んで朝帰りするなんて、愉快だ。三条周辺のビル街と鴨川が明るくなり始める中、一緒に帰るのは会話はあまりなかったけれども楽しい。

12:00 起床。活動時間の三倍は寝ないと活動限界にすぐ達してしまう僕からすれば寝不足である。

お腹がすいたので近くのファミリーマートに行ってパンとジャンプを買って帰った。ハンター×ハンターは面白い、絶対面白い。毎週ハンター×ハンターを読む時が一週間のうち一番集中する、後ろで誰かが長電話していたがいっさい聞こえなかった、

もう春休みだからなにをしててもいい。いつものようにスマブラXをしよう、来年のスマブラ大会まで練習は怠れない。リンクはブーメラン、弓矢、爆弾の弾幕が基本、世の常識である。

14:00 映画をみる。普通のアパートに住んでいたら映画を見るならだいたい一人だろうが。寮で映画を見ると勝手に人が集まって、これが好きとか、俺がどうのこうのと、勝手に喋り出す。

横の人が自分にとっては意外な考えを持っていて、それを聞いて僕が驚くということが起こる。

この場のように、あの時はこうでなんなんだとか、難しい解釈の仕方とか、単に好き嫌いの話とか、面と向かって話していると人間一人で考えれる事が非常に制限されている事を実感する。制限があるというネガティブに取られるかもしれないが、それよりも完全に自分の外側に有った考えに触れる事が出来たことに感動するべきだ。寮はそういう事が起こり易い環境だ。

17:00 やる事があったけど、なにが面白そうな事をやっていていっしょにやろうと誘われた、いつもは断る事が多いが、今日は何か起こる気がする。においを嗅ぎ取った！きっと今日はその場の流れに乗るべき時なのだ、予想もつかない事が起こるだろう。すぐ横に誘い合える人間が居るとするのは恵まれている。自分がやろうとした事しかやろうとしないなんて、なんて面白くないんだ。

19:00 なぜかそわそわする。春になるとわそわする。春のお花見会では調子に乗り過ぎてしまった、という事をおもいだした。酔って吉田寮の守護妖精をリアカーでひいてしまい、サクラの枝をを棒でたたいて花を散らしまくり、タマネギが嫌いだからという理由でタマネギを勝手に捨て、女の子に向かって下ネタ、を言ったそう。ゆるしてね

21:00 吉田寮の梁山泊、執行委員会。ここにいる知的な上回生達と日夜議論を交わせば、なんだか文化的な京大生になれた気がするだろう、

23:00 眠いから寝る！夢で見たのは初めて吉田寮を訪れた時の事。

吉田寮と言う表札は有るが、ここは門である、遠くの方に目をやると、見えるか見えないかくらいで建物が有る事が認識出来る。一体ここから何メートル有るのだろうか。意を決して入り口への長い通路を歩き始める、道の両脇には寮生の自家用車だろう、何台も駐車してある。さらに驚いた事に、通路の途中でクラシック音楽が弾かれている、曲名は分からない、彼らの技術によって聞いた事も無い音楽に変えられていたからだろう。歴史を感じさせる建物の入り口に着く、とそこに居た受付嬢に寮の案内役を捜してもらおうように頼んだ。彼女は明るく、親近感が持てた。放送で呼ばれてきたのは、なんと、熊を連れてくる男であった。熊はその男に完璧に服従していた。その男にしたがい寮内を見て回る。熊にも驚いたが、やはりこの男の方が気になった、落ち着いていてかつ陽気な話し方に私は吉田寮生とはこういう者なのかと安心感を覚えた。管理棟に居るとき、すぐ隣で「~万円負けた」という声がした、しかし彼は笑っている、彼に取っては大した負けではないのだろう。そうでなければイカしているとしたか言いようが無い。

寮生が数人で酒を飲みながら議論をしている、

「吉田寮はいろんな意見を持ったやつが居て、それを忌憚なく言い合えるってところが面白い、というかそこそが吉田寮を特徴づけるものだ。」「そうだ、吉田寮は思想を持っている。混沌とした状

態を保つという事、どういう方向にも転ぶ可能性を持ちつづけるということ！さまざまな思想を持つ人を受け入れるが、思想の強要などはナンセンスだという事。！！」「ここでいろんな人と話していたら疲れる事もあるけど、つねに問題が有ることには飽きない」酔っているからか私には、よくわからない。

猫が居る、顔つき、体躯。美しい動物だと思う。考えている事が単純そうに見える時もあり、複雑な事を考えているように見える時もある。

一通り回った後、食堂という所で音楽ライブをするという事で、誘われるままに行ってみた。食堂はにぎやかで、彼らは全員楽しそうだった。壁は古く、絵が描かれている。

音は一旦壁に入り込み、内部でいままで蓄積された思いや歴史が音に混ざり、はね返って耳に届く。そういうものも曲に混ざり、会場全体を酔わせているように感じられた。